

我が男声合唱団 楠声会が私にとっては50年ぶりに 合唱組曲「山に祈る」の練習をするという。というのも今年の9月8日に開催予定の東京楠声会（楠声会東京支部）の演奏会の曲目に入っているの、鹿児島からも応援に行く人のために練習をしようということのようだ。もっとも私は自分の実力からしてもわざわざ東京まで歌いに行く気はないのだが・・・。

ただ好評であれば、来年予定の楠声会 60周年記念演奏会でも演奏するということもあるとの話もあり真剣に練習せざるを得ない。そうなるともた 100名を越すおじさんたちの「山に祈る」が鹿児島の空高く響くことになる。それはともかく、指揮者の諏訪さんから練習日に楽譜のコピーが配られた。

この曲は私が鹿大フロイデ・コール4年生であった50年前の昭和36年(1961年)の演奏会で確か九州初演ということで歌ったなつかしい曲である。しかもそれまで男声合唱のほとんどがそうであったように入部以来アカペラ（無伴奏）でしか歌ったことのなかったフロイデ・コールが初めて女性ピアニストにお願いして伴奏をつけるという画期的な歌でもあった。しかもナレーターまでつくというのだ。

この歌が出来た経緯はこうだった。昭和34年、当時多発していた山岳遭難事故を減らすため、長野県が遭難者の遺族の手記を集めた「山に祈る」という小冊子を発行した。それを目にしたダーク・ダックスがその中の大学生の遭難事故について、彼が残した手記と母親の手記によって合唱組曲にする企画をたて、男声合唱組曲「月光とピエロ」などで有名な作曲家 清水 脩氏に依頼した。

曲は山に向かう元気な歌から遭難死にいたる場面へと曲（ストーリー）が進んでいく。曲と曲の間に母親役のナレーターが、手記を読むという構成になっている。

かすかな記憶の中にあつた“買った楽譜”が2階の屋根裏の倉庫に眠っているはずだと、倉庫から古い楽譜やプログラムなどが入っているダンボール箱を取り出した。もうすっかり忘れていたがこの楽譜入れには、片側にフロイデ・コール時代の、もう一方には北九州時代に妻も一緒に歌っていた北九州混声合唱団の楽譜などが収まっていた。両方ともガリ版刷りで紙質も悪くすっかり茶色に変色していて音符や歌詞も読みにくくなっており時代を感じさせる。いまから50年前後のものだけだから当然のことではある。しかしこの楽譜類は、初めて私が北九州に出て行くときにリンゴ箱に詰めてもって行って以来、8回の転居の後、今の住まいに落ち着くまで大事にしてきたものの一つである。

そしてその中からなつかしい「山に祈る」が出てきた。50年ぶりの発見である。これだけがガリ版刷りではなく、カワイ楽譜出版の冊子である。しかも私がフロイデ時代 唯一買った冊子の楽譜だったようだ。そのためかこの無精者の私がハトロン紙で表装までしているではないか。びっくりである。だからこの楽譜に限ってはちょうど50年目にあたる今も新品同様である。表紙には次のように書いてある。

合唱組曲 山に祈る 構成・作詞・作曲

清水 脩

そして後付けをみて驚くことが二つあった。

昭和36年3月31日印刷・昭和36年4月6日再刷発行 ￥120。

これを見て改めて思ったことは、4月6日発行の楽譜を買って6月22日には鹿児島市中央公民館において開催された第18回定期演奏会で演奏している。これからみると2ヶ月くらいの練習期間で演奏したことになるが、爺さんになって、覚えることに時間のかかるようになった今では考えられないことである。

そしてもう一つの発見はこの楽譜の120円という値段である。最近買う組曲の楽譜は1200円前後のものが多いため50年を経過して楽譜類はちょうど値段が10倍くらいになったことが解る。

もっとも当時の大学卒業生の初任給はあのフランク永井が昭和32年頃から歌っていた「13800円」くらいで50年たった現在の20万円くらいは10数倍になっている。それだけ世の中が豊かになったということか。しかし実感としてはかえって先の見えない不安な時代に入ってきたような気がする。

50年前の楽譜からなつかしさとともに色々なことを考えさせることも出てきた春の一日であった。2011、3月記

